

## 大 学 図 書 館 問 題 研 究 会 京 都

〒607 京都市山科区大宅山田町34 京都橘女子大学図書館 小林倫道気付  
(Tel) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124

## 図書館員という職業の真の危機はどこからくるか

— アメリカにおけるライブラリアンシップの現在 —

篠原 俊夫

1. はじめに

1994年の秋に3日間にわたって東京で開催された「第5回日米大学図書館会議」の簡略版とも言えるワンデイセミナーが京都外国語大で開催された。報告の内容はほとんど記憶にないが、いまでも鮮明に思い出されるのは、日米の大学図書館関係者の大学図書館をめぐる状況認識の相違である。アメリカの大学図書館関係者は、一見隆盛に向かうかに見える現在の大学図書館を危機意識をもってとらえているのに、日本側の大学図書館をめぐる状況認識は、マルチメディア時代の幕開けをほとんど無批判に楽観的、肯定的にとらえているように思えたことである。ただ、学術情報センターの井上如教授が会議をしめくくる言葉のなかで、いらだちをあらわに見せて、彼我の意識の格差を指摘されたことが今も印象に残っている。アメリカにおける図書館専門職の危機意識がどこから生まれ、それが図書館の未来をどこに導こうとしているのか、これは大きな問題であるだけに容易に答えが見出せない。たまたま最近のAmerican Libraries誌に、性(gender)と職業の観点から、専門職の危機を論じた文章を見つけたので、以下に紹介しつつ、この問題を検討してみたいと思う。

2. Gender, power, and the dangerous pursuit of professionalism /

by Roma M. Harris (American Libraries, Oct. 1993., p. 874-876)を読む

ライブラリアンシップは女性の仕事と見られたくないという闘いのなかでサービスという理想を遠ざけてしまったのかというのが、Harrisの図書館専門職という職業の現在についての認識である。肝腎の本を読まずにこの原稿を書いているのが苦しいところなのだが“Librarianship: the erosion of a woman's profession” (Norwood, N. J.: Ablex, 1992) というタイトルの本がそれで、彼女は図書館専門職が歴史的に女性の仕事として一段低い

位置付けをなされるなかで、様々な不利益をこうむってきた事実を明らかにするとともに正統な評価と待遇とをもとめる闘いの課程で本来、図書館専門職が第一義的にもつべきサービスという理念を放棄しつつあるのではないかという憂慮を示しているのである。否、むしろ理念を放棄した闘いの行き先を憂え、怒っているのである。

彼女は図書館学の教員になる前は、カウンセリングを専門とする心理学者だったという経歴がある。「性 (gender)に関するいくつかの問題を考えることがこの図書館専門職の将来をかたちづくる力を理解するのに欠かすことのできない要素だと信じている。」

「北アメリカでは100年以上にもわたって図書館の仕事は女性の仕事であったという事実を認識することなくして、今日のライブラリアンシップにおこりつつあることを把握することは不可能だと考える。」

彼女は図書館専門職と顧客 (利用者) の関係が、他の専門職におけるそれと異なっていることに注目する。図書館員と利用者の関係ではエキスパートとしての図書館員の役割より利用者の必要度の方が肝腎なのである。しかも、図書館員の提供するサービスは図書館に関係する世界の中でも外でも不当に低い評価しか与えられていないという。その結果、躍進する経済のなかの情報部門のなかで主役たることができなかつたという。

「情報時代」のかまびすしい呼び声のなかで、図書館専門職はめざましい躍進をとげどころか、1980年代のアメリカでは、実際には数において減少したという事実を指摘する。

Leigh Estabrookは、「The growth of profession」(College and Research Libraries, v. 50, no. 3, p. 287-296)で、「真の専門性」のなかにあると認められる職業は、自身の仕事を完全にコントロールし、自身のサービスが届けられる外部市場をコントロールし、社会的、政治的地位を獲得しようと奮闘した結果、得られるものだと強く主張している。

ステイタスも、高い水準のコントロールもライブラリアンシップの本来の属性とは言えない。そこで、図書館員が伝統的に固有の領域としてきたものの実態とはなにか、図書館員の声が情報政策に影響を及ぼすことがほとんどなかつたのはなぜなのか明らかにせよという要求が出てくることになる。

図書館専門職の中からも数の上で女性優位である傾向を憂える声が聞こえてくる。たとえば、Carol Holeの「The feminization of the public library」(AL, Nov, 1990, p. 1076-1079)と題する論文は、「公共図書館の専門職が女性によって占められることになれば、男性から敵視され、無用な施設に転落する。」という趣旨のものだという。図書館専門職が現在のように低いのは、女性図書館員の「信用し難い」資質から生じているのだとする風潮は根強いものがあり、それらの女性と同一視されるのは堪え難い考える人たちはライブラリアンの肩書きを捨て、「情報ブローカー」、「情報科学者」、「情報管理者」等の肩書きを名乗りはじめた。これらは、通常男性によってなされることの多い仕事——例えばオートメーション・システムを含む技術部門、計画、財政などの管理的機能の重視とか、外部からみてより困難と認められる仕事を偏重する傾向につながっているというのが、Harrisの主張である。

言い換えれば、管理的業務とは難易度の高い業務であり、とりも直さず男性向きの業務と同義であり、本来の仕事であるサービス業務は女性が担当する難易度の低い「ハウス

キーピング」にすぎないということになる。要するに、これらの業務は昔ながらの目録づくりであり、子供相手の仕事ではないか、と言いたいらしいのである。

### 3. 職業倫理の喪失

弁護士や裁判官など法律の専門家の世界は、伝統的に男性優位の職業と言えるが、専門職としての図書館職との違いは、平等のパートナーシップのもとに情報の交換や提供がおこなわれるか否かということにあるという。法律家は顧客とは基本的に平等ではなく、専門家として優越する立場から適当な情報を選択し、与える。顧客はしかるべき敬意をこめて与えられた情報とアドバイスに対して代価を支払うというのが、一般的図式である。

一方、図書館の仕事は情報の仲介者としての役割をはたすことであり、どんな情報を必要とするかという最終的な決定は利用者の判断に委ねられている。これは図書館業務の特性からして当然のことであり、そのことが直ちに専門職の優劣の序列化につながることは考えにくいのだが、より高いステータスとしての社会的認識を求める図書館専門職の意識から、図書館専門職が自身を利用者に対して優越する立場に位置付ける立場を求め、結果的に利用者が危機的状况においこまれている。顧客に対する専門家の優位をという立場を図書館専門職にもとめれば、情報資源の平等な共有という観念は放棄され、情報に対する対価を支払うことができる人を優遇する立場を選ぶことにつながる。かつては図書館の無償のサービスとして提供されてきたものを加工して有料で販売する方向へ向かうのも、自然のなりゆきである。情報の商品化、有料化は必然的に利用者層をもてる者と持たざる者に選別してゆく。また、管理的業務こそ高度な専門職の役割であるとする立場は、必然的に利用者と直接接してサービスする本来の業務を程度の低い仕事として非専門職にまかせることにつながる。

高度の専門職を自認する人々はカウンターを放棄して、顧客（利用者）に対して、彼らの欲するものを見付けだすのを援助することより、優秀なマシンをいかに使うかということを読くに精力をそそぐことになる。

大学図書館のレファレンス・カウンターにアルバイト学生を配置し、所在情報などの簡単なレファレンスから、少しの経験と知識があれば対応できる範囲までの質問に対しては専門職が直接対応しないという方式はもはやめざらしくはなくなっている。学生の対応できる質問の比率は70%くらいに達するという報告もある。しかし、懸念されるのは数字だけみれば、学生の対応できる質問の比率が大きく常時専門家を配置するのはコストに見合わないとしても、専門家がいてこそ利用者との対話から高度な質問が生まれてくる可能性もあるのだという発想はない。もしかしたら利用者は学生アルバイトには対応可能な質問しかもちかけず、カウンターの背後に身を隠している専門家の存在など思い及ばないため結果的に利用者を切り捨てているかも知れない可能性について配慮がない。専門家は高い報酬を得ている以上、それに見合った内容の仕事のみを選択して遂行すべきだというのがアメリカ的合理主義である。学生アルバイトでこと足りるレファレンスと高度な専門的知識を要するレファレンスは担当者が異なるのが正しい対処の仕方だと彼らは主張する。こ

れに異義をとらえることはアメリカ的合理主義が貫徹する世界においては極めて難しい。しかし、ここには危険な落とし穴があるように見える。それは図書館サービスのあり方が利用者の都合ではなく図書館専門職の都合にすぎない見地から発想されているからだ。そしてこれこそライブラリアンシップという専門職にかかわる倫理意識の喪失だとHarrisは主張するのである。

#### 4. 管理的、技術的業務を重視することの意味について

管理的業務と技術的機能を重視する傾向は、一つには技術こそがより高度な未来のステイタスの鍵であり、女子の仕事とみなされている仕事から、ということは評価の低い仕事と同義であるが、そこから遠ざかることで高いステイタスを獲得し、維持できるという結論に短絡する。社会学者のNina Torenは専門的職業に対する最大の脅威は、サービス理念を喪失し、専門職的機能のルーチン化を通じて抽象的な知識基盤をコントロールすることができなくなった時だとしている。まさに現在その危機が図書館専門職をおそっている。利用者に対する直接のサービスについての管理者の評価は、コスト重視の観点から低くなる一方である。皮肉なことに専門職の中心的な技術はオートメ化ははてしもなく進んでいくばかりである。大部分の図書館ではオリジナル・カタログの仕事はほとんどなくなり、目録データは外部の業者から購入したり非専門職がコピーをつくることでもまかせている。非専門職の起用はオンライン検索から蔵書構築を含むレファレンス機能の全分野におよんでいる。専門職の仕事の範囲は見方によっては狭められるばかりである。

#### 5. ライブラリアンシップの中心をなす核の放棄

図書館員は自己の学問分野の核心を放棄しかねない危機に直面している。すなわち、情報部門において自己の独自性を生み出す根拠たりうるものとは何かということだが、知識を組織し、情報要求をうまく処理する技術のことで、時節柄いま最も必要とされ、期待されているにも拘らず、それを自ら放棄しようとしている。Harrisの主張するところによれば、これこそ図書館員の倫理意識の欠如から生じてくる問題だということになる。

魂なきステイタスの追求のなかで、女性の仕事というイメージから逃れたいがために、自身の本来の価値が生まれてきた原点を見失うようなことがあれば、ライブラリアンシップが地域共同体に提供するサービスにかわり得るものも無くなってしまふことになるだろう。もし図書館員が管理的活動とハイテクの適用を正統的な専門職の唯一の機能と認め続けるならば、同じようなことをより高度なレベルで遂行できるコンピュータ学者、ビジネススクール卒業生、会計士、法律家等々の専門家にとって代わられる道しか残されていない。いまや彼らもまた情報分野の一翼を担うものであるからだ。

図書館員が専門職の侵食を食い止めたいと思うのなら、女性のものとしてきた伝統的な図書館の仕事というイメージを遠ざけようとしめないことである。専門職としてきちんと訓練された図書館員であれば、図書館員しかできない価値のあるサービスを顧客（利用者

)に提供できるはずである。検索やその他の処理がしやすい方法で情報を組織すること、利用者が自分の必要とする情報に関連する資料の存在を見つけ出す可能性が増すように、その情報が必要な理由を明確にすること、求める情報にたどりつくよう手助けする能力がそれに該当する。

図書館員が共同型の関係に基づいて利用者に対して直接サービスすること、公衆の情報への平等なアクセスの権利を擁護すること、労働現場でのステイタス、報酬、平等のような雇用問題に積極的にかかわることなどに再度真剣に立ち向かうことによって、自己の技術の可能性を再確認することこそ望ましいことだとHarrisは主張するのである。お互いが専門職として不十分だとして背きあったり、ほんとうは専門職の大切な中核をなすものなのにそれを遠ざけて新たなものをつくり直そうとするのではなく、また図書館という分野が女性中心の歴史をもつことを自己卑下したり、否定するのでもなく、自己の正統な領域を強化することによってのみ、情報分野における図書館専門職の役割を強化することが可能なことを理解しなければならない。

## 6. おわりに

以上が、Roma M. Harrisによる専門職の現在を不当におとしめられた処遇と捉え、「女性の仕事」としての歴史的な位置付けから脱却することで救済しようとする風潮こそ、ライブラリアンシップの真の危機を招くものだという主張の全容である。図書館職が女性の仕事であり、そのことが専門職としての位置づけを不当に低いものにしていくという考え方は公共図書館であれ大学図書館であれ、アメリカの図書館界に歴史的に根強く存在することは事実である。しかし、危機の原因を性(gender)と専門職の観点からとらえ、マイナスをむしろプラスに転換せよという主張はアメリカでもきわめてめずらしい。なおHarrisの意図は時代の風潮に対して警告することであり、図書館学の厳密な論文として書かれたわけではないことをおことわりしておく。(しのはら・としお/京都大学法学部図書室)

## 関連参考文献一覧

1. Gender, power, and the dangerous pursuit of professionalism / by Roma M. Harris. American Libraries, Oct. 1993, p. 874-876
2. Creative tension or mutual misunderstanding? : LIS departments and professional practice / by John Feather. Lib. Assoc. Rec., 96(1) Jan. 1994, p. 30-31.

3. The death of library education / by Bert R. Boyce. American Libraries, March 1994, p. 257-259
4. Librarians and library educators in the 1980s : shared interests, cooperative ventures / by Marianne Coope and Shoshana Kaufmann. College and Research Libraries, v. 50, no. 2, p. 164-180.
5. Unobtrusive studies and the quality of academic library reference services / by Jo Bell Whitlatch. Collge and Reseach Libraries, v. 50, no. 2, p. 181-194.
6. The academic librarian and faculty status in the 1980s : a survey of the literature / Kee DeBoer and Wendy Culotta. College and Research Libraries, v. 48, no. 3, p. 215-223.
7. What professional librarians expect from administrators : another librarian's view / by Cheryl A. Price. College and Reseach Libraries, v. 48, no. 5, p. 408-412.
8. The effectiveness of an information desk staffed by graduate studentss and nonprofessionals / by Beth S. Woodard. College and Research Libraries, v. 50, no. 4, p. 455-467.

目次	図書館員という職業の真の危機はどこからくるか — アメリカにおけるライブラリアンシップの現在 (篠原俊夫) …… 1頁
----	---